2024年3月17日  川越教会

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　丸山　勉

今、イエスが私の前に

［ヨハネによる福音書18章28～38節］

「人々は、イエスをカイアファのところから総督官邸に連れて行った。明け方であった。しかし、彼らは自分では官邸に入らなかった。汚れないで過越の食事をするためである。そこで、ピラトが彼らのところへ出て来て、「どういう罪でこの男を訴えるのか」と言った。彼らは答えて、「この男が悪いことをしていなかったら、あなたに引き渡しはしなかったでしょう」と言った。ピラトが、「あなたたちが引き取って、自分たちの律法に従って裁け」と言うと、ユダヤ人たちは、「わたしたちには、人を死刑にする権限がありません」と言った。それは、御自分がどのような死を遂げるかを示そうとして、イエスの言われた言葉が実現するためであった。そこで、ピラトはもう一度官邸に入り、イエスを呼び出して、「お前がユダヤ人の王なのか」と言った。イエスはお答えになった。「あなたは自分の考えで、そう言うのですか。それとも、ほかの者がわたしについて、あなたにそう言ったのですか。」ピラトは言い返した。「わたしはユダヤ人なのか。お前の同胞や祭司長たちが、お前をわたしに引き渡したのだ。いったい何をしたのか。」イエスはお答えになった。「わたしの国は、この世には属していない。もし、わたしの国がこの世に属していれば、わたしがユダヤ人に引き渡されないように、部下が戦ったことだろう。しかし、実際、わたしの国はこの世には属していない。」そこでピラトが、「それでは、やはり王なのか」と言うと、イエスはお答えになった。「わたしが王だとは、あなたが言っていることです。わたしは真理について証しをするために生まれ、そのためにこの世に来た。真理に属する人は皆、わたしの声を聞く。」ピラトは言った。「真理とは何か。」ピラトは、こう言ってからもう一度、ユダヤ人たちの前に出て来て言った。「わたしはあの男に何の罪も見いだせない。」

[1]　信仰を与えられる出来事は

皆さんはどのようにして信仰を与えられたのでしょうか？もちろんそれは、百人百様の歴史があると思いますし、正に神様の恵みのバラエティですよね。様々なきっかけや出会いの中で導かれてきたということだと思います。でも、これは私の印象ですけれども、例えば、自分から滝に打たれるような決死の覚悟を持ち、修行するような思いでキリスト教信仰を求めたという方は少ないと思います。もちろん、飢え渇いた心をもって教会を訪ねる、聖書を開くということはあると思いますけれども、でも、キリスト教の信仰は、修行や、何かを達成する感覚で信仰を持つというではないと思います。そんな達成感や、努力して習得していくような感じではなく、いつしか自分の中に神様との出会いが起こっているとか、御言葉などを通して、神様・イエス様に迫られるような思いが与えられ、捕らえられているような思いに導かれるようなことがあるのではないかと思います。それは「聖霊のお働き」としか言えないようなことだと思います。

読んで頂いた今日の聖書の中で、イエス様を前にしたローマ総督のピラトが口から出した言葉というのは、とても印象的な言葉です。「真理とは何か」（18:38）。これは、深い「問い」の言葉ですよね。真理があるとするなら、それは一体何なのかと。ただ聖書のこの場面を見ると、ピラトは深い求道心などから問うたと言うよりも、イエス様の言葉に反応して、思わず言ってしまった言葉のように思います。18章37節で、イエス様はピラトに、「わたしは真理について証しをするために生まれ、そのためにこの世に来た。真理に属する人は皆、わたしの声を聞く」 と言われました。ピラトはこの時、どちらかというと不機嫌だったと思います。ユダヤ人の議員や律法学者たちが、まだ早朝の頃、このイエスという男のことで裁いて欲しい、自分たちはその権限がないので、ということで官邸の前までやって来たのです。今ピラトがエルサレムにいるのは、過越の祭の時であり、多くのユダヤ人が集まるので、自分がいることで治安を安定させるためです。だからなるべく穏やかにやり過ごしたいのに、イエスという男が、この前には大祭司カイアファの審問を経て、運ばれてきた。しかも早朝です。彼にとっては、言ってみれば面倒臭い案件に思えたに相違ありません。しかし、何であれ今、ピラトは不思議なようにイエス様の前に立たされて、イエス様の言葉に対して、「わたしは真理について証しをするために生まれた」って言うけれど、一体その「真理って何？」と問うように導かれたのです。ある意味、とても不思議なことです。

彼、ピラトはこの時、イエス様に“関わって”しまったんです。出会う予定はなかったのに、“出会って”しまったんです。そしてその時に、思いがけず自分の中から問いが生れてきた。「真理とは何ですか」と。私は思いました。私たちはこの時のピラトのように、自分の側の準備ということを超えて、このように神様・イエス様からチャレンジを受ける時がある、自分の中に眠っていたそんな真剣で霊的な問いを問わされてしまう時があるのではないでしょうか？ピラトがこの時に問うた問いというのは、実はピラト自身にはね返ってくる問いなのだと思いますし、私たちもまた、信仰に導かれる中に皆それに似たような出来事を体験するのではないかと思うのです。

[2] 主イエス様によって問われる

「真理とは何か」。―この問いに、イエス様は直接にはお答えになっていません。と言いますか、私は今回準備してあぁそうかと思ったのですが、イエス様はこの後十字架の苦しみを背負われることになる訳ですけれども、主イエスの言葉というのは、この後十字架の上で語られた言葉はありますが、その前は、この言葉、「わたしは真理について証しをするために生まれ、そのためにこの世に来た。真理に属する人は皆、わたしの声を聞く」 が最後の言葉なのです。そして「真理とは何か」と、ピラトは問いをぶつけた訳です。この後はイエス様は無言。しかし、その無言こそが私たちに対する語りかけなのです。

私自身とイエス様との出会いの話を簡潔にお話します。私が教会に通うなったいきさつというのは、実は真面目な求道心などでは全くありませんでした。私は大学1年の時、10数年ぶりに再会した幼馴染の女の子（大学生）とそのお母さんがいて、日曜日は教会に行っているということを聞いたのがきっかけです。またその子に会うことが出来るためには私も教会に行けば良いのだと思ったのです。私はその時クラシック音楽がとても好きでしたから、キリスト教文化には興味はあったんです。ですが、信仰を持つなんて思ってもいませんでした。ところが、私はいつしか教会という場所が、＜自分が居てもいい場所＞となっていることを感じました。というのは、私はその頃、本当に内側にこもる少年で、この世の中はもうどうしようもない、生きて行くに値しないこの世界だと勝手に思って、ひどい虚しさに襲われ、生きることを諦めたくなることが度々あったのです。親にも誰にも言えません。ところが、導かれた教会の同じ年代の青年たちには不思議な明るさがありました。そして集会の度ごとに祈りをしている。これは一体何なのだろうと、そんな所から聖書にも真剣に向き合うようになりました。そういう中で、ある時、私は聖書からの迫りのようなものを感じました。それは「わたしはあなたを知っているよ。安心して生きて行っていいよ」というようなものでした。私は全身が温かくなるような感覚を感じ、涙が溢れました。今ではそれは聖霊の働きだったのだろうと思います。

そして、その後、私は自分の傲慢さというものに気が付かされました。いわゆる放蕩息子の兄貴の姿の中（ルカ15章）に、他者のことなど全く顧みず、自分さえよければ良いとして生きて来た自分の姿を見ましたし、今日のこのピラトの中にも自分と似ているものを感じます。彼は結局自分の利益、自分の都合しか考えることが出来ず、イエス様を死に追いやってしまう存在です。そうです。聖書は、主イエスは、問いかけてくるんです。「あなたは神様の前に何者か」。

イエス様は「わたしは道であり、真理であり、命である」（ヨハネ福音書14：6）と宣言されました。そうですね。イエス様ご自身が道であり、真理であり、命であるのに、私は自分こそが道、真理、命なんだと思っていたのです。でもそれに気付かせてくれたことは救いでした。私は先ほどお話したその幼馴染みの子とはそれ迄でしたけれども、むしろイエス様との付き合いがそれから始まって行ったんです。それまでまだ20年弱しか生きていませんでしたけれども、私は思いました。「私は神様の命の中に生かされているのだ、こんなに嬉しいことはない。ゴールもはっきり定まっている。こんなに幸いな人生はない！」と。

[3] 「キリストには替えられません」

今は「受難節」ですね。私たちはイエス様のお苦しみや十字架について、何と痛ましいことか、そして何と人間は、イエス様を十字架に架けてしまうほど罪深い存在なのかと思うことがあると思います。私もそうです。しかし、今回思いました。ひょっとすると大きな思い違いをしていたかもしれないなと。私たちは「イエス様、十字架にかかってくれてありがとう。そのおかげで私は何の苦労もなく生きて行ける。感謝だ」と、この出来事を、どこか軽く思っていないかと思ったのです。イエス様は“身代わって下さった”とよく言います。そしてその通りだと思います。だとするならば、私たちはイエス様の姿の中に自分自身を見て行くということがあって良いのではないでしょうか？私はひょっとしてイエス様のことを傍観的に見てはいないだろうか。そうであれば、ピラトと思じです。「わたしはあの男に何の罪も見出せない」（18:38）で終わり。これでは、自分の方がイエスの裁判人になってしまっています。そうですよね？ そうではなくて、本当は十字架は、私たちの裁きの場所です。私たち自身が、罪人として死刑判決を受け、鞭を打たれ、人々の嘲笑を受け、罵られながら刑場に歩む。それが本当です。やがて私たちが審判者なる神様の前に立たされる時、私たちは何も言えないと思います。ただ神様の裁きを待つ身なのです。その時主は何を私たちに真向かい、問われるでしょうか？イエス様は37節で、「真理に属する人は皆、わたしの声を聞く」 と言われました。「真理に属する」。主から「あなたは真理に属してきたか」と問われたら、何と語ることが出来るでしょうか？―これから一緒に歌いたい讃美歌（『キリストには替えられません』）がその答えではないか、それ以上の告白はないのではないか、私はそう思います。お祈り致します。

私たちに命を与え、私たち罪人をどこまでも愛して下さる主イエス・キリストの父なる神様、ピラトと主が向かい合っています。そして問う存在が、逆に問われています。私たちも同じです。しかし、あなたの十字架は、どうしようもない私たちすべての者のためであることを信じます。「キリストには替えられません。この方が私に代わって死んだゆえです。」本当にそうです。どうかイエス様のお苦しみの姿の中に、私自身の「裁き」と「赦し」があることを覚えさせて下さい。主よ、感謝致します！この生涯を一切あなたにお委ねします。この一週間も主イエスと共に歩ませて下さい。主のお名前によって祈ります。アーメン。